

6月30日、ドイツに第14代の大統領が誕生した。クリスティアン・ヴルフ(Christian Wulff)。1959年生まれ。ドイツ・キリスト教民主同盟(CDU=中道右派)出身。ニーダーザクセン州の現職知事(州首相)から、アンゲラ・メルケル率いる中道右派政府与党から推薦を受けて、中道左派のドイツ民主社会党(SPD)と緑の党(グリーン)が推すヨアヒム・ガウク(Joachim

ドイツ14代大統領誕生 最年少の保守派

欧州自動車市場情報
論説委員
Brigitte M. Katsuta



Christian Wulff

Gauck、無所属 1940年生まれ)との一騎討ちとなった。ガウクは、旧東独在任時代、共産主義政府と一線を画した人物として知られる。

ドイツの大統領は、ドイツの国家元首。国会両院の議員と与野党が推す支持者で構成(比例代表制)される「連邦会議」で、間接的に選出される。投票は3回。1回目と2回目は過半数を必要とし、第3回目は単純多数決で決まる。候補4人。代議員1,244人。ヴルフは第3回目の投票で、625人の過半数で決まった。延々約9時間30分にわたる激戦だった。

第13代大統領ホルスト・ケーラー(Horst Koehler)は今年5月31日に、第2期の途中で辞任した。ケーラーは、アフガニスタン駐留ドイツ連邦軍の活動に関する発言で、野党とマスコミから、バッシングを受けた。政界とのパイプが弱いケーラーは、与野党の政争に利用された。それでも、内外で深刻な問題に直面しているドイツを一層混乱に陥れたことは、下院議長からも強い批判を浴びた。今回の大統領選挙で、政府与党勢力は644人の過半数を持ちながら、接戦になった背景として、前大統領が任期半ばで辞任したこと、ユーロの危機論議、メルケル連立内閣の中での政策をめぐる対立が指摘されている、マス



第14代大統領を選出したドイツ連邦会議。会場には、ドイツ下院(連邦議会)の議場(写真)が使われる。
写真: www.ftd.de (Financial Times Deutschland)

コミの多くが、大衆に人気があるガウク支持を表明したことなども、少なからず影響している。

ドイツでは近来、大統領選挙を、現在の間接選挙から、国民の直接投票とすべしとの声が聞かれるようになってきた。大統領選出の方法を変えるには、ドイツ基本法(憲法)の改正が必要で、下院の3分の2の賛成が必要となる。ドイツ憲法は、日本のそれと同様、アメリカが起草したもの。基本的な精神は、ドイツが仕掛けた2度の世界大戦の反省を踏まえたもので、国家元首の力を厳しく抑え込んでいる。ドイツの大統領は、国家元首で、ドイツ連邦を代表する。もし、大統領を直接選挙で選ぶことになれば、大統領の権限が大幅に強化されることになり、連邦首相の権限と衝突する。さらに、民主主義の名のもとに、国家の象徴に相応しくない候補者に道を開くことになりかねない。現実には、ドイツは欧州連合(EU)のなかでも、あらゆる面で競争を繰り広げている。自制力を欠いた民主主義の導入は、かつてヴァイマル(ワイマル)共和国が、ヒトラー政権を生んだ二の舞を演じかない。

ドイツにおける民主主義の歴史は、まだ浅く、国民の多くは、民主主義を「自主管理できる」までに成熟していない。ドイツの学校制度で、15才の平均学力は、OECD加盟31か国中、未だに平均以下である。ドイツの政治家は戦後、国民を愚鈍にさせることで、統治をやりやすくしてきたと言われる。半世紀にわたる愚民政策の結果、教師と生徒の知的水準が低下、北欧や日韓両国と太刀打ちできない。元ドイツ大統領ローマン・ヘアツォーク(在任1994~1999)は、直接選挙による大統領選出に強い危機感を示している。筆者は、ドイツ人(18才まで日本在住)だが、ドイツ人が国民投票に耐えられるまで成長するには、まだ数世代、今後100乃至150年はかかるのではないかと思うことがある。■